

人間力向上のための学校教育における

平成二十八年十二月六日

自然・職業・福祉・部活動、体験活動の充実についての提言(中間まとめ)

自由民主党政務調査会文部科学部会人間力向上プロジェクトチーム
自然・職業・福祉・部活動・体験教育の充実
座長 土屋正忠

はじめに

教育は国家百年の計である。

時代の変化や要請を視野に入れて学校の在り方や教育内容を見直すことが求められることは当然だが、「流行」への対応といった表層にとわられず、教育に対して国民が求めているものをしっかり受け止め、百年の計としての「不易たるもの」を見据えた教育政策を展開することこそ自由民主党の使命である。

このような観点から、文部科学部会は、「人間力向上プロジェクトチーム自然・職業・福祉・部活動・体験教育の充実」を設置し、体系的で長期的な自然体験活動を三十年にわたって積極的に進めている兵庫県教育委員会の高井教育長からのヒアリングや議員同士の活発な議論を行っている。本プロジェクトチームの検討テーマはまさに教育の本質であり、今後ともヒアリングや視察に基づいた掘り下げた審議・検討が必要であるが、中央教育審議会における次期学習指導要領改訂の審議の動向を踏まえつつ、ここにこれまでの議論の成果を中間まとめとして整理し、提言することとした。

政府においては、本中間まとめの趣旨をしっかりと踏まえ、その実現を図るよう強く要請したい。

情報環境の激変と子供達

情報環境の劇的な変化は子供達に大きな影響を与えている。子供達の自殺やいじめなどの報道に接する度に、ゲームやインターネットの影響で、子供達の間には「命はリセットできる」とか「生命は蘇ることができるといった認識が広まっているのではないかと危惧を抱かざるを得ない。生命は有限だからこそ、人間は自然や人知を超えたものに対して畏敬の念を持ち、伝統や文化をしっかりと受け止めてより善く生きよう、気高く生きようと思う。生命が有限であることの認識は人間性や道徳性の源泉であるが、今、子供達を取り巻く情報環境の変化はその原点を蝕みつつある。

教育の「不易たるもの」

しかし、情報環境の変化は昨日今日始まったものではない。現在、学校においてタブレット端末を活用することが教育改革にとって重要といった指摘もあるが、例えば、昭和三十九年に早川電機(現在のシャープ)はオールトランジスタの電子式卓上計算機(電卓)を発売、この画期的な技術革新は仕事の仕方を大きく変えた。グローバル化や人工知能(AI)時代、第四次産業革命などに我が国社会を対応させる必要があると議論されているが、我が国は何度もこのような技術革新の波の中で、人間性を見失うことなく技術を手段として使いこなしてきた。そのことが我が国の最大の強みの一つであると言えてよい。

現在、学習指導要領改訂について審議している中央教育審議会においても、いかに人工知能が進化しても人工知能に目的を与えるのはあくまで人間であり、その目的の良さや正しさ、美しさを自ら判断できる人間としての強みを育んできた我が国の教育の原点を大事にすべきと審議されていることには大いに賛同したい。グローバル化や情報化に対応するためには英語教育や情報教育の充実も必要ではあるが、その根底にある人間性をはぐむための教育の「不易たるもの」の原点が見失われてはならない。

人間性を涵養するための体験活動の充実

この教育の「不易たるもの」にあつて、その最も重要なものの一つが体験活動であることは論を俟たない。「早寝早起き朝ごはん」による生活習慣の確立からはじまって、自然体験活動、職業体験活動、福祉体験活動、部活動を通じた様々な体験活動を通して、バーチャルリアリティや拡張現実(AR)ではなく、五感を使った確かな手応え、地域の異なる年齢の人たちとのふれあいや協働、自他の安全を守り気持ちよくお互いが協力するためのルール、地域や仲間との絆といったもの大切さを実感・体感し、身に付けることは、人間性の涵養と知・徳・体のバランスのとれた子供達の成長にとって必要不可欠である。

また、二千年以降、我が国のノーベル賞受賞者数はアメリカに次いで世界第二位である。小柴昌俊博士、大村智博士、大隅良典博士など我が国のノーベル賞受賞者は、「自分は自然から学び、自然に育まれた」と自然に対する観察の大事さや畏敬の念を述べている。我々日本人は、自然から多くのことを学んで歩んできたということも忘れてはならない。

体験活動の充実における学校教育の役割

この人間性の涵養と知・徳・体のバランスのとれた教育は我が国の学校教育が四十年にわたって重視してきた。海外からも高く評価されている我が国の教育の一つの軸が体験活動である。

そして今、体験活動の充実における学校教育の役割は非常に大きくなっていく。ほんの数十年前までは近くの空き地で異年齢の子供達が集まって遊んだり、子供達同士で森を探索したりと学校外でも体験活動の機会があったが、今はそのような場がほとんどなくなっている。地域の教育力の減退はそれ自体大きな問題だが、現実には学校がすべての子供達に体験活動を提供できる唯一の場となっていると言えよう。体系的な教育を継続的に集団のなかで行うことは学校教育の大きな特長であるが、体験活動の充実にとって、学校教育の持つこの体系的・継続性・集団性が決定的に重要になっている。

また、現在、学校が格差の連鎖を断ち切る場となることも強く要請されているが、人間性や社会性、学力に大きな影響を及ぼす「体験活動格差」も極めて深刻である。恵まれた子供達だけが豊かな自然体験活動などを経験できるといった格差は絶対に生んでならない。子供は親を選べない。学校教育はすべての子供達に同じスタートラインに立つことを保障する重要なインフラである。

そのため、学校教育、特に義務教育において体験活動を充実するという政策的な方向性を明確に示し、地域や関係団体など学校外の多くの大人との連携・協力を充実・強化するための各般の施策を展開することが求められる。

学校教育における体験活動を長期化するために

体験活動の充実については、前回の学習指導要領改訂の際、自然体験活動や職場体験活動は「一定期間(例えば、一週間(五日間)程度)にわたって行うことが望まれる」旨明記された。しかし、体験活動の実施期間は現在まであまり長期化していない。長期化のために必要なこととしては、高井兵庫県教育長からのヒアリングなどを踏まえると、

- ① 学校教育における体験活動の重要性、有効性の認識のさらなる共有
- ② 学校や学年を越えた体験活動の体系的な確保、継続性の確保
- ③ 体験活動を行うための授業日数・時数の確保
- ④ 保護者負担の軽減などのための予算の確保・充実
- ⑤ 関係機関・団体との連携・協力体制の確立
- ⑥ 体験活動を指導する教員の指導力の向上

学校教育における体験活動の充実のための提言

本プロジェクトチームにおいては、引き続き、④や⑤、⑥などについて、地方財政措置や国の支援の在り方などの具体的な検討を進めるとともに、中間まとめにおいては、①、②、③の観点を中心に以下の事項を提言する。

- (一) 中央教育審議会における審議を踏まえ、学習指導要領改訂による教育課程の充実のなかで学校教育における体験活動の重要性、有効性を一層明らかにし、学校や地域、保護者の間でその認識のさらなる共有を図られるようにすること。その際、すべての学びの基盤でもあり、目標でもある人間性の涵養の観点から体験活動が重要であることを重視すること。
- (二) 兵庫県教育委員会が学校や学年を越えた体験活動の体系的な確保を確保するために導入している「キャリアノート」なども参考にしながら、すべての学校において、子供達が経験した体験活動を振り返り、自分自身のことや将来について考えるための書き込み方式のノート教材の導入・活用を図ること。
- (三) 授業時数の確保を図りつつ、東京都武蔵野市のセカンドスクール型の長期集団宿泊活動や職場体験活動、就業体験、福祉体験活動などを円滑に実施するため、子供達の発達の段階や各教科等の特質を踏まえて、これらの活動のなかで理科や社会、家庭科などの教科等の指導を行う場合には、その時間をそれぞれの教科の授業時数に含めることができる旨の明確化を図ること。

おわりに

明治五年には我が国には自然村を含めて七万一千の自然村、自治体があり、一つ一つの地域において、「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なくらしめん事を期した。そのことは我が国の成長と発展の原動力そのものであった。

今、このような明治以来の遺産を受け継ぎつつ、「一万能などと言われる時代だからこそ、学校教育でなければ他者とかかわり、協働しようとする意欲などを育む体験活動をすべての子供達に提供することはできないこと、その体験活動の充実には学校を中心としながら我々大人がしっかりと協力する必要があることを改めて強く訴えたい。

自由民主党は、時代の流行に浮足立つことなく、人間性を涵養するための教育の「不易たるもの」をしっかりと見据えながら教育政策を進めるといふ原点を、ここで重ねて確認し、さらに具体的に責任のある議論を進める決意である。